

■ ヤケに高い！ドル／円と日経平均株価の連動性に注目

ドル／円は、足元で一時的にも139円を割り込む水準にまで値を沈める展開。一昨日(30日)のアジア時間帯には一時140.93円処まで上値を伸ばす場面もあったが、既知のとおり、同日の17時(日本時間)から財務省・日銀・金融庁の3者会談が行われると伝わった途端、大きく円高方向に切り返す動きとなった。

「3者会談」の当事者らは否定していたが、この会談の目的が一層のドルロングを思い留まらせることにあったことは明白。「当局は円相場水準そのものよりもベクトルの強さの方にチェックの目を光らせている」というのが市場の受け止めである。

実際、ドル／円が5月初旬に位置していた134円前後の水準から5月下旬にかけて141円近辺まで値を上げる動きとなった場面というのは、上昇のベクトルが少々強く出ていたと言える。それもそのはず、この間に米連邦準備理事会(FRB)による6月利上げ実施の有無に対する市場の見方は「なし」から「あり」に大きく傾いていた。

ところが…である。昨日(31日)の市場では、6月米利上げは見送りとの見方が再び有力視される状況となった。FRBのジェファーソン理事とフィラデルフィア連銀のハーカー総裁が、ともに6月利上げは見送るべきとの考えを示唆したことが最大の要因である。もちろん、ブラックアウト期間入り直前というタイミングでの発言であっただけに、そのぶんインパクトが強かったというところもある。

まして、5月の「月末」にあたり、恒例とも言えるリバランス目的の米長期債買いが入ったことで、物理的に米長期債利回りが低下したこともドルロングを一旦外しておこうと考える向きにとっては格好の口実になったと見られる。

さらに、連日の上昇を続けていた日経平均株価が目先のなげ一服&調整安となった(31日)ことも、連れてドル／円が値を下げる要因の一つとなった。このところ、日経平均株価とドル／円の連動性がヤケに高くなっていることは再認識しておきたい。

FRBが6月の追加利上げを見送る可能性は十分にある。ただ、それは必ずしも米利上げサイクルの終了を意味するものではない。まして、市場で一頃盛り上がっていた「年内利下げ開始」の観測は大きく後退している。つまり、依然としてドルの下値が堅い状態はしばらく続くものと思われる。

テクニカル的に見ても、ドル／円は足元で上向きの200日移動平均線(現在は137.10-20円処)よりも上方に位置する強気の展開となっており、当面は同線が下値サポートとして意識されやすい。なお、週足ロウソクは31週移動平均線よりも上方にあり、先週は「遅行線」が26週前の水準を上抜ける強気のシグナルを灯していた。

今後の上値については、ひとまず直近高値が位置する141円手前の水準が意識されやすいが、同水準を上抜けた場合は、一目均衡表の週足「雲」上限が位置する142.50円処までの上げ余地もないではないと見ておきたい。

FRB理事や米地区連銀総裁らの個々の発言はさておき、あくまで「データ次第」ということからすれば明日(3日)発表される5月の米雇用統計の結果も重要視される。また、本日発表が予定されている5月のユーロ圏消費者物価指数(HICP)速報値の結果にも市場の注目は集まっている。昨日発表されたドイツとフランスの物価データが、ともに予想外の前月比マイナスとなったことから、すでに市場ではユーロ圏全体のHICPも低水準に留まると見ている可能性が高く、そのぶんハードルは下がっていることも考えられる。

よって、仮に本日発表の結果がやや低水準に留まったとしても、逆にユーロ安一服となる可能性があると個人的には見る。

(06月01日 10:10)